九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

青刈燕麦（Avena sativa L.）の生産に関する試験

立野, 喜代太
九州大学農学部

松尾, 恒喜
九州大学農学部

https://doi.org/10.15017/14116

出版情報：九州大学農学部農場研究資料. 4, pp.6-7, 1977-06. University Farm, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

青刈燕麦（Avena sativa L）の生産に関する試験

立野喜代太・松尾恒喜

この試験は，飼料用青刈燕麦の生産向上を目的として，播種量および施肥量を変えた場合，生育にどのような影響を与えるかについて，生草ならびに乾物重の変化をみたものである。圃場は畑地（農場旧園区の一部）を使用し，1plot当り10㎡，2回反復とした。平畦，条播栽培（条間50cm）で，昭和49年12月9日播種した。播種量は10a当り4kg，6kg，および8kgの3段階とし，元肥および追肥は高度化成48号（成分量N16%，P_2O_5 16%，K_2O 16%）を用い，施肥量を標肥区（元：30kg，追：20kg）および多肥区（元：40kg，追：30kg）の2段階とした。調査は2回にわたつて行ない，第1回は最高分けつ期（3月24日），第2回は出穂始期（4月14日）に行なつた。以下はその結果の概要である。なお，この試験は実験(Avena test)用の採種を主目的に栽培を続けてきたもので，種実の収穫は園芸学教室によつてなされた。

試験の結果

第1表　生草ならびに乾物生産（g/m^2）

施肥	播種 (kg/10a)	最高分けつ期（3／24） F	最高分けつ期（3／24） (D)	出穂始期（4／14） F	出穂始期（4／14） (D)	出穂始期（4／14） H
標肥区	4	516±226	(84.8±30.6)	1780± 78	(213.2±88.8)	60.4±3.4
	6	847±174	(129.4±26.0)	2283±353	(222.0±45.0)	73.2±4.3
	8	802±111	(128.2±23.0)	2100±368	(271.1±43.9)	68.6±4.1
多肥区	4	800± 81	(117.3±14.5)	2493±609	(334.2±81.9)	67.7±2.4
	6	1159±139	(161.2±22.3)	3707±291	(433.0±43.2)	78.4±3.8
	8	1147±329	(162.4±44.1)	3320±850	(377.0±89.4)	76.9±3.7

註）F：生草重，D：乾物重，H：草丈（cm）

第1表は，1plot当たり3カ所のsam plingを行ない，反復による合計6ケ所の㎡当りの生草ならびに乾物重を測定した平均と標準偏差の値を示す。この表から，標肥区よりも多肥区の収量が高く，6kg／10a播種が他の播種区にくらべて高い傾向が認められる。

第2表は生草重の分散分析の結果を示す。3月24日に採草した分では，播種量間に有意差は認められない。しかし，施肥量間で差が認められる（5%水準で有意）。また，播種量と施肥量との交互作用によつて，生草収量に差があらわれるとは考えられない。一方，4月14日採草の分を見ると，播種量，施肥量の両処理間で差が認められる（5%水準で有意）。播種量と施肥量との交互作用は前回同様，認められない。播種における3処理間の差を検定した結果，6kg—4kg，8kg—4kg間に1%水準で有意な差が認められ，6kg播種した生草収量が最も多く，次いで8kg，4kgの順に少なくなつている。しかし，6kgと8kg播種との間の差は有意ではない。

第 2 表　　生草重の分散分析表

（3／24）

要　因	ss	∅	ms	Fobs	Foos	Fool
播種量(S)	293731	2	146862	3.50	5.14	10.9
施肥量(M)	294847	1	294847	7.02*	5.99	13.7
S×M	1928	2	964	0.02	5.14	10.9
誤　差er	251867	6	41978			

（4／14）

播種量(S)	1529341	2	3058682	8.94*	5.14	10.9
施肥量(M)	3756483	1	3756483	10.98*	5.99	13.7
S×M	267351	2	534702	1.56	5.14	10.9
誤　差er	2053305	6	342218			